

Back SwampとYazoo Type Riverの例

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-09-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 竹内, 正辰 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00006114

Back Swamp と Yazoo Type River の例

竹 内 正 辰*

静岡市街から安倍川にそって凡そ8 Kmさかのぼると、東岸の山の下に鯨ヶ池がある。深さ2 m未満、面積50,000 m² ぐらいの小さい池である。池の東は急勾配の山がせまり、西側は田畑に利用される緩傾斜の地形である。この緩傾斜面は西の安倍川堤防につづく。地形図に示されているように、この緩傾斜面は賤機山堂の一部に、安倍川沖積原がくいこんだ湾入地形に発達している。

賤機山堂は北の竜爪山から真富士山方面につづくソーダ粗面岩質火成岩体で西側は瀬戸川累層群、東は静岡層群に衝上断層で接している。瀬戸川累層群のなかを流れ下っている安倍川が、鯨ヶ池附近から火成岩体を直接侵食して流れる。またこの附近の安倍川西岸に足久保川があるが、瀬戸川累層群のなかの一つの断層谷と考えられる。その断層線の延長にたまたま湾入地形が位置することから推測して、局部的に火成岩体が侵食をうけた感がする。

このせまい湾入地形の中の等高線は第1図のように、山脇部落から東南にむかう軸をもつ扇状地状である。この表面には川は流れていないし、またかつて流れた様子もみあたらない。しかもこの軸方向が安倍川本流の流れ方向と傾いている。これを筆者は安倍川と足久保川の合力的方向と考え、扇状地状地形は安倍川自然堤防をこの水勢で溢流した後背堆積物によると想像する。したがって川の流路の延長方向に軸をもつ普通の扇状地とは意味がちがう。

それであるから、こうした地形を「河岸沖積錐」という方がむしろ誤解をまねかないかもしれぬ。

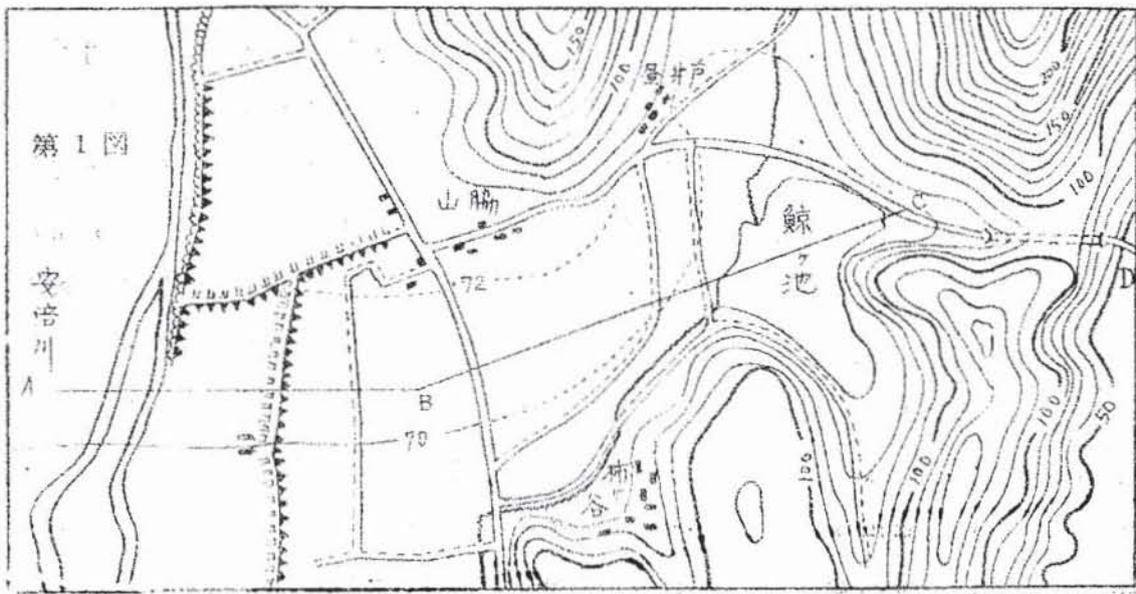
第1図A B C Dにその断面を第2図に示した。堤防は現在は人工で構築されているが、かつての自然堤防の位置に設けられている。

この堤防から安倍川水路側は、あきらかに天井川化し、堤防の外側から1.5 mの上位に現在の堆積面があがっている。沖積錐面の勾配は軸方向でおよそ $\frac{1}{60}$ である。この勾配に対して東岸の山脚は垂直にちかい急勾配で沖積錐の末端に交わる。

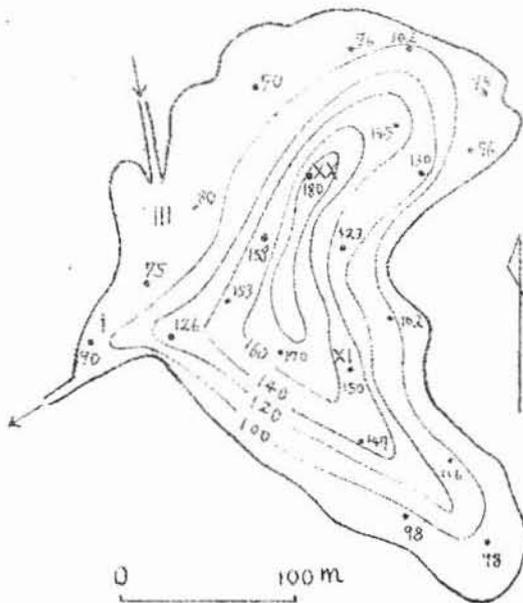
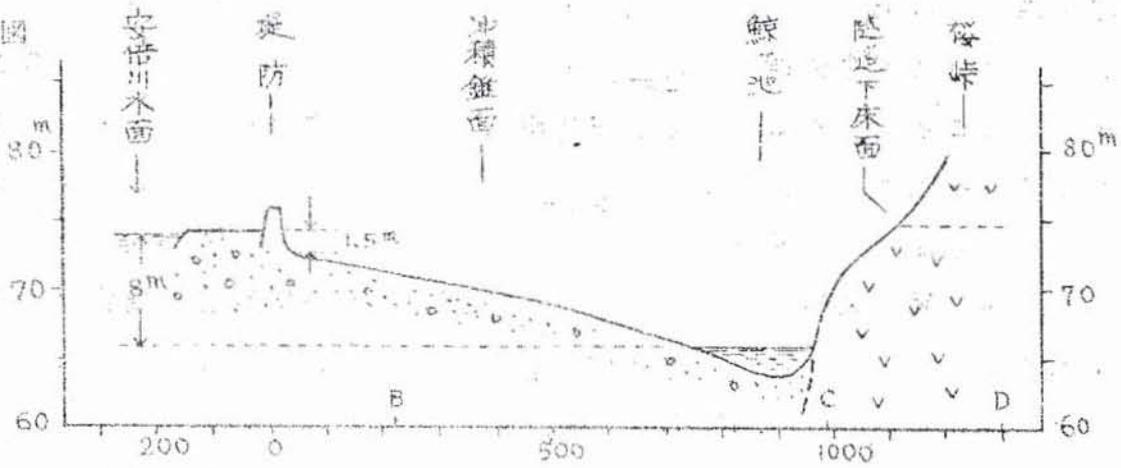
*教育学部助教授

池を涵養する水源には、地表水としては、昼井戸方面から流れこむ貧弱な水系のほかには常時給水する川をみない。けれども、池から流れ出ている小川の柿ヶ谷下流でさかんに湧水する地下水がみられ、また池の西岸には部分的にそうした地下水がしみ出している。池盆の地形と水温を測定したところ、池から流出する附近(第3図中のI)では、表面水温が最もひくく、流入口にちかいⅢの表面水温がこれに次いでいる。この両所の池底は80~90cmでその水温は、池の中央部の同一深度以下の水温と大差がない。このことは流入水と地下湧水とが合して、たゞちに流出することを暗示している。その地下湧水は、上記柿ヶ谷下流の水路中のものと全様に安倍川の伏流水と考える。つまり、この池は安倍川自然堤防の後背池(Back Swamp)で、沖積錐面が東側山脚に交わる自然の凹地に湛水し、後背湿地(Back Marsh)のかわりに池となったものである。今日まで河跡湖として説明されているが、安倍川のかつての流路にしては、沖積錐のある平地は余りにせまく、池の位置を川が曲流していたとは思われない。また現在の沖積錐の発達前に、かりに安倍川の河水がこの部分に水をたたえていたことがあるにしても、沖積錐の発達の実状を考えると、ずいぶん水位がひくかったころであろうから、今日の池の形となった後の池の成因としては河跡湖としない方が妥当である。

流出水は沖積錐の末端をたどって流れ、安倍川本流の自然堤防後背地を流れ下り、本流に合流することなく、静岡の市街に達している。このように流れる川をYazoo型の川という。A. K. LobeckがGeomorphology p.225に説明しているように、Mississippi川の支流Yazoo川が150 Kmの長さをもって後背地を本流に平行にながれているので、これを模式的川として命名された。この鯨ヶ池から流れ出るYazoo型川には特別に名称はつけられていないが、市街に流れこんでからは、静岡平野の扇状地状三角州を賤機山にそって流れ、北の麻機方面にむかい、また一部は人工水路によって市駅南方面に流されて、どちらも灌漑に利用されている。市民としては恩恵によくしている川であるから、市内のYazoo型川とその水源にあたる後背池をとくに記したわけである。なお本項についてのくわしい報告は、静岡大学教育学部研究報告第13号(1962年)を参照されたい。



第 2 圖



第 3 圖

(I, III, XI, XX は水湿測定箇所)